

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑥

恋の序章 麗しきワインたち

絳月 まや

イタリア語を習い始めた頃、歌から入るのも楽しそうだと CD を物色していて、一枚のアルバムを「ジャケ買い」した。ジャケ買いとは、レコードや CD の中身を知らないまま、表紙のデザインに惹かれて購入することである。映画のオープニングを見ているようなジャケットだった。どこまでも続く海岸を豆粒みたいなユリカモメが歩いていく。そのセピア調の写真を縁取った黒い帯の上に、白い文字でルドヴィコ・エイナウディというアーティストの名前が映し出されていた。静かで、優しくて、少し切ないイメージに引き寄せられた。

ワインにもジャケ買いがある。ラベルのデザインで選ぶのだ。それは、恋に似ている。その日のデートの相手をとりあえず顔で決めてしまうようなもので、外見にだまされて失敗することもある。身分違いの高嶺の花に魅せられたなら、日夜悶々としてデートを申し込むのに何年もかかることもある。もちろん、ラベルには必要最小限の情報は記載されている。「キアンティ・クラッシコ」と書いてあれば、それがトスカーナを代表する上質のワインであることはわかる。けれど、それはフィレンツェでは小さなスーパーにでさえ何種類も置いてある。大きなエノテカならこれでもかというほどたくさん置いてある。生産者名も記されているが、それが誰のことだかわからなければ何の役にも立たない。文字の情報がどれほどのものか。中身は飲んでみるまでわからず、売る前に飲ませてくれないのだ。ならば見た目の好みで選ぶ以外、何で判断すればいいというのか。運がよければ、

そうして選んだラベルたちは、ワインに秘められた素敵な物語を語り出してくれることだってある。そのうえ中身も当たりなら、なおいい。ジャケ買い成功である。



【「ネクトル・デイ」のまばゆい星空】

「キレイ系」—Bello—

遠い昔の、記憶の中のプラネタリウムみたいだ。星々のまたたきを散りばめて輝く、ラピスラズリの夜空に吸い込まれてしまいそうになる。ふと立ち

寄った旅先のエノテカで出会ったこのラベルに、一目惚れしてしまった。「キレイ系」ではなく「カッコイイ系」に分類する人もいるかもしれない。イタリア語では「きれい」も「かっこいい」も Bello なのが、妙に腑に落ちる。美しいと認識されたものはすべて Bello なのだ。星座は九つの恒星をつないで描かれ、頭文字を左から拾えば「ネクタル・デイ (NECTAR DEI)」という言葉が浮かびあがる。神々の美酒を意味する、このワインの名前だ。ラベルの中の星空は、そのとてつもなく大きな名を背負って恥じることなく、並々ならぬ高級感を醸し出していた。それだけに値段も立派、自分ごときが気軽にジャケ買いできる範囲を超えていたため、いったんは頭を冷やしに外へ出た。一期一会、もう二度とその美しい夜空に巡り会えなかったとしても悔いはないのかと自問し、逡巡し、意を決して店に戻った。

このワインを製造する「ニッタルディ (Nittardi)」の農場は、キアンティ・クラッシコの生産が許される老舗地区に位置し、起源を 1183 年にさかのぼる。神々の美酒の名もいわれのないことではなく、当時、敷地内の小塔が「ネクタル・デイ」と呼ばれていたことから着想した。歴史的なワイン銘醸地だけあって、あのミケランジェロが農場の所有者だった時代もあった。16 世紀、バチカン宮殿でシスティーナ礼拝堂の内装を手がけていた稀代の天才芸術家が、自慢の自家製ワインを時のローマ教皇に献上したというエピソードが残されている。これにちなんで、この「ネクタル・デイ」もまた、毎年、歴代教皇の元に届けられている。それほど、中身に自信があるということだ。

「ネクタル・デイ」はキアンティ・クラッシコではない。トスカーナには、スーパータスカンと呼ばれる、従来のイタリアワイン法の枠組みを超えたワインがある。有名なものは超絶に高額だ。土着品種のサンジョベーゼを主体にしなければならぬキアンティ・クラッシコと異なり、国際品種の使用に制限がない。自由な発想でワインをつくりたいキアンティ・クラッシコ生産者たちにとって、スーパータスカンは魅力的だ。「ネクタル・デイ」もそのひとつで、イタリア屈指の名醸造家カルロ・フェリーニ氏の協力を得て、ティレニア海沿岸のマレンマ地区で育ったカベルネ・ソーヴィニオンを主体につく

られている。マレンマといえば、スーパータスカンの聖地ボルゲリの、ちょっと南にある注目の新興ワイン産地だ。大奮発してジャケ買った、そのお味は——。

赤紫の海があったなら、夕陽を浴びてこんなふうにくらめくのだろうか。グラスに鼻を近づけると、黒い果実の甘酸っぱさがぷんとたちのぼった。舌の上に乗せると、バニラやシナモンの風味がして、渋みが余韻を残す。大枚を投じただけのことはある。星降る夜、バッカス様もこの芳醇な一杯に酔いしれているのかもしれない。



【伝説の「花売り娘たち」】

「カワイイ系」 —Bellino—

ラベル右端の赤い服を着た三人の花売り娘にズキューンと心を射抜かれた。「美しい」を追求するイタリアで、「かわいい」に出くわすことは、それほど多くない。ポップカルチャーとしての「かわいい文化」を世界に発信する日本で、「かっこかわいい」「キモかわ」「病みかわ」と、いたるところに「かわいい」が宿っているのとは訳が違う。では、「かわいい」は何でできているのかと考えた時、丸さ、ゆるさ、小ささといった要素が思い浮かぶ。接尾辞の—ino は小ささを表す。Bello の小さいのが

Bellino。「美しい」の小さいのが「かわいい」わけだ。日本でイタリア語を学んでいた頃、「かわいい」と伝えたい時は Carino を使っていた。しかし、フィレンツェでは、むしろ Bellino をよく耳にする。私のアパートの大家さんは、Bello という時は社交辞令であることもまあり、心底いいと思った時は Bellino が口をついて出てくるものだと言っていた。親しみと愛情が込められた表現なのだ。ただし、このようなフィレンツェことばとフィレンツェ人について、他地域の人からは、美という領域について我が物顔なのが鼻につくとの声もある。なんとはなしに、京ことばと京都人を思い出させる。

ラベルの花売り娘たちは、ちょこんと小さくて、赤いワンピースは丸く膨らんで、まんまるに開いた口が緊張を緩和させる。ラベルの基調が白であるためか、アイロンのビシッとあたってシャツの袖口に、赤いボタンが三つさりげなく並んでいるのを想像せずにいられない。エスプレッソを飲もうと肘を曲げた瞬間、花売り娘たちが目に飛び込んでくる。たちまち、視線が釘づけになる。小さくても、主演は彼女たちなのだ。それが証拠に、ラベル中央にやわらかな書体で記されたこのワインの名前「Le Fioraie」は「花売り娘たち」の意だ。



【一列だけ赤く色づく葡萄畑(ピエマッジョ)】

このワインを製造する「ピエマッジョ (Piemaggio)」の農場もまた、キアンティ・クラッシコ生産地区にあり、敷地内には 11-12 世紀のも

のとされる教会の遺構がある。伝説によれば、ある夏の日、この地を通り過ぎようとした巡礼中の修道士があまりの暑さに気を失った。それを見た三人の花売り娘がグラス一杯のワインを与えると意識を取り戻し、再び歩き始めた。数か月後、この恩を忘れずに戻ってきた修道士は小さな教会を建て、そこに葡萄の木を植えたという。何世紀もの時を超え、伝説の花売り娘たちは、聖なるワインとそれを生み出す大地の象徴として生き続けているのだ。さて、そのお味は——。

サンジョベーゼの酸味がほどよく効いて、赤い果実の香りとのバランスがいい。何よりも印象的だったのは、その鮮やかなルビー色の透明感だ。グラスの中で、赤い花を手に持った三人の乙女がきよやかに微笑んでいるようだ。キアンティ・クラッシコとしては求めやすい価格帯だったので満足感が高い。

*

ジャケ買いした CD のルドヴィコ・エイナウディが誰だか知らないまま、そのアルバムを家に持ち帰った。ケースから取り出して聴き始めた時、衝撃が走った。歌がなく、楽器だけで演奏されたインストゥルメンタルだったのである。歌手ではなかったのか。イタリア語学習を目的としていたという点では、ジャケ買い大失敗だ。けれど、そのトリノ出身の作曲家が奏でるピアノの音色は、海辺をたゆたう小波さざなみのように静かで、優しく、少し切なくて、ジャケットが抱かせたイメージを裏切ることはなかった。奇しくも、アルバムのタイトルは「Le Onde」、波。ワインのラベルにも、その中身をつくった人たちの感性は見え隠れするはずだ。その感覚と波長が合えばこそ、中身はどんな香りでもんな味なのか知りたくなる。「オシャレ系」「ロマンチック系」「色っぽい系」、ジャケ惚れしたワインたちの物語は次回へと続く。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

クラウディオ・マグリス 『ミクロコスミ』を訳して

二宮 大輔

ついに夢を叶えてしまった。自らの訳書が出版されたのだ。これまでも文芸書だけでなく、演劇や映画字幕の翻訳もさせてもらい、どれもこれも自分の人生の重要な構成要素になっているのだが、今回はあのクラウディオ・マグリス『ミクロコスミ』の拙訳を出版してもらえたということで、喜びもひとしおだ。



マグリスは 1939 年にトリエステで生まれたドイツ文学者で、中欧の歴史と文学に精通し、若くして評論家として注目を浴び、その後、小説とも歴史書とも言えない不思議な、かつ重厚感のある作風で作家としても数々の文学賞を獲得している。そのマグリスがどうして自分にとって特別な存在なのか。訳書のあとがきに始まり、個人的にはすでにいろいろな場所で彼について書き散らしてきたので、今回は自分がどのようにマグリスを知り、

固執するようになったのか、その経緯を振り返ってみたい。

そもそも、文芸翻訳というものにあこがれを持ったのは、約 30 年前、中学生のころに読んだ漫画『風雲児たち』がきっかけだった。江戸時代末期、鎖国していた日本が開国に踏み切るまでを描く絶筆の歴史ギャグ漫画なのだが、物語はそのはるか前、関ヶ原の戦いからスタートする。徳川家の天下統一の後、海外とのやりとりが厳しく規制されている状況下にあつて、西洋に目を向け、その先進的な文化や技術を貪欲に取り入れようとする知識人たちがいた。彼らが発端となり、その知識や精神が継承され、開国につながるというのが、『風雲児たち』の大まかなストーリーだ。江戸中期、そんな先進的な知識人のひとりとして登場するのが『解体新書』を出版した杉田玄白だ。ドイツ語からオランダ語に訳された医学書『ターヘル・アナトミア』をもとに、日本語に翻訳した『解体新書』は、正確には杉田玄白だけでなく、前野良沢と中川淳庵というオランダ語に長けた医師が中心となって翻訳された。科学的な西洋医学を取り入れたい一心で、満足な辞書もないなか歳月をかけて翻訳を進めてきた三人だったが、いよいよ出版できる段になったところで、いさかいが起こる。一刻も早く『解体新書』を出版したい玄白に対し、三人の中で最も学者肌の良沢は、誤訳があつてはならないと、もう一度原本を丁寧に研究し、訳を見直したいと主張したのだ。議論は平行線をたどり、ついに堪忍袋の緒が切れた玄白が、良沢に対してこう言い放つ。

「あなたは自らの名前に傷がつくのが怖いだけだ」

そこまで言われては仕方がないと観念した良沢は、出版を了承する代わりに、翻訳プロジェクトから身を引き、自らの名前を『解体新書』に載せることを拒否したのだった。良沢との関係性が壊れてしまった玄白と淳庵だったが、実際に刷り上がった『解体新書』を良沢のもとに持っていくと、良沢はこれまでの日々を思い出して涙を流し、ついに三人で抱き合つて号泣するのだった。

このエピソードに感動して翻訳家を志したと言ったら、安直な印象を受けるかもしれないが、力で敵をねじ伏せるお決まりの少年漫画の主人公とは異なる知的なヒーローの姿に、当時の私は心を奪われた。その数年後、今度はイタリアのマフィアを主人公にした『ジョジョの奇妙な冒険』に心酔して、独学でイタリア語の勉強を始めた。振り返ってみると、イタリア語で文芸翻訳がしたいという夢は、100%漫画からの影響ということになる。自らの幼稚な思考回路を少し恥ずかしくも思うが、これはもう動かしようのない事実であるし、上記の二作品は本当に素晴らしい漫画だったのだ。

さて、2000年に私立大学の西洋史学科に通い始めた私は、不真面目にイタリア語の勉強をだらだら続けていたのだが、大学四年生になり、どうしても就職活動がしなくなかったので、大学院に進み本格的にイタリア語を勉強しようと考えた。そこで訪ねたのが旧大阪外国語大学の研究室だ。アポイントメントも取らずに、原付バイクでのこのこ外大までやってきた私が研究室に入れてもらえることはなかった。当時の外大の教授から「まず自分が何をやりたいのかははっきりさせてから来なさい」と、文字通りの門前払いを喰らってしまった。そもそも就職したくないからという理由がおかしいわけで、教授の対応は完全に正しいのだが、恥知らずな大学生だった私は、ふつふつとした気持ちを抱えて、外大校舎のあった箕面の坂道を原付で駆け下りながら、それならイタリアに留学してイタリア語を学ぼうと決意を固めたのだった。ちなみに、そのとき留学の相談に乗ってもらったのが、何を隠そう日本イタリア会館京都校だ。

2005年、会館のすすめでローマに留学した私は当初から近所の書店に通い、訳すべき文芸書の物色に明け暮れた。本屋の棚に燦然と並ぶダンテやレオパルディは読める気がしなかったのので、比較的読みやすい現代の作家たちに目を付けた。語学学校や書店の店員に紹介してもらったステファノ・ベンニやニコロ・アンマニーティなどだ。それらの作家が大好きでたまらないというわけではなかったが、最初は単語が平易な短編や中編を選び、それをなんとか読み切るという行為に達成感を覚えて楽しかったのだ。

そんな現代小説の探求のさなか、留学先で知り合った日本人の先輩から教えてもらったのがクラウディオ・マグリスだった。ノーベル文学賞のオッズにもたびたび名前が挙がるトリエステ在住の作家らしい。さっそく代表作の『ドナウ』を買って読んでみたが、これがよくわからなかった。それもそのはず、マグリスの文体は一文が異様に長く、見たこともない形容詞をいくつも並列させて言葉を修飾する。さらに『ドナウ』にはこれといった主人公も登場せず、ドナウ川沿いにまつわる逸話や歴史上の人物について語りつくしていくばかり。話が途切れては転換し、ストーリーも追いつらい。それまで読んでいた短編小説とはわけが違った。

それでもこの人は何かすごいことを書いているという感触があった。例えるならば、道もゴールもわからない鬱蒼とした森に分け入るときにわくわく感をマグリスの本に感じた。この印象は、二冊目に読んだ『マイクロソミ』で、より明確になった。この作品もドナウと同じく、表面的には主人公など登場せず、トリエステを中心にマグリスにとって慣れ親しんだ山や海や公園を巡っていく。よくわからないけれど、この作家はすごい。そう確信した私は「あなたの本を日本語に訳したいから、ぜひ会ってほしい」とマグリス本人に宛てて手紙を書いた。数週間後に返事を受け取った私は、マグリスのことを教えてくれた先輩とともに、喜び勇んでトリエステまで会いに行った。

待ち合わせ場所であるトリエステ湾に面したレストランで待っていると、マグリスはタクシーに乗って颯爽と現れた。昼食をごちそうになり、ほんの一時間程度しゃべっただけで、これとってたいした話もできていない。私は今よりももっとへたくそだったイタリア語で「あなたの本を訳したい」と宣言しただけなのだが、著者本人に会ったという実感が、翻訳を実践する上での推進力となった。

とは言うものの、訳し始めた『ドナウ』の一章はなかなか完成しない。そうこうしている内に、三回留年し2012年になんとかローマ大学を卒業して日本に帰国することになった。そのタイミングで、なんとマグリスの『ドナウ』が邦訳出版された。これはドイツ語訳からの重訳らしい。それなら次は『マイクロソミ』をイタリア語から訳すしかないだろ

うと、本格的に翻訳に着手し、並行して目ぼしい出版社やイタリア関係の機関に話を持ち掛けた。そしてようやく共和国というひとり出版社で辣腕を振るわれている編集者の方に、企画を受け入れてもらったのだった。



【クラウディオ・マグリス】

出典元:https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claudio_Magris.JPG

実際に『マイクロソミ』が出版された現在は、喜びと怖さが入り混じった気持ちになっている。曖昧な記憶だが、作家の後藤明生は、ニコライ・ゴーゴリを訳す前、大学の指導教官だったロシア文学者の横田瑞穂に「小林秀雄の『本居宣長』を読んだか」と尋ねられたらしい。横田はこう続けた。「あれは小林秀雄と本居宣長が同等だということではないか。今きみは年齢を重ねゴーゴリと同等になったのだから、ゴーゴリを訳しなさい」。

さて、果たして今の自分が、マグリスと同等かと考えると怖くなるのだ。ドイツ語とドイツ文学を極め、ラテン語やギリシャ語にも長け、ハプスブルグ家の衰退やユーゴスラヴィアの崩壊を肌で感じてきたマグリスが相手だ。同等どころか、足元にも及ばない。さらに彼は自らもドイツ文学の翻訳

に携わるがゆえに、翻訳とは作者と訳者の共同作品であり、そのために作者は訳者と密にコミュニケーションをとらなければならないという独自のスタンスを持っている。インタビューで彼がそう発言しているのを知ったのは、だいぶ後になってからのことだが、この「共同作品」という言葉がまた末恐ろしかった。できることなら、何年でも時間をかけて訳を見直したい。

ただ、それでも自分がマグリスを訳したい、訳さなければならないという強い気持ちもある。訳すことが、どこの馬の骨ともわからない日本人の私にわざわざ時間を割いて会ってくれたマグリスへの誠意あるお返しだと思うからだ。

振り返って気づいたのだが、マグリスを訳して日本で広めたいという気持ちと、よりよいものを出すために時間をかけたいという気持ちは、まさに『風雲児たち』の杉田玄白と前野良沢の構図ではないか。江戸時代から変わらず、翻訳家たちを悩ませる永遠のテーマなのかもしれない。

(翻訳家、元当館語学受講生)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです！

- ・関西圏以外や外国にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
 - ・外出を控えられている方
- 受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>